

短歌

おお た あ い か ちょう

大田哀歌鳥

防府市
(1890～1977)



【著作】
歌集『聾者の歌へる』(大正11)
歌集『自画像』(昭和45・自画像刊行会)

大田哀歌鳥は、山口県の短歌振興に大きな功績を残した歌人である。

明治二十三年(一八九〇)二月一日、佐波郡佐波村欄干(現・防府市上天神町)の染物屋に生まれた。本名・義一。十五歳頃から独学で歌を学び、『中学世界』や『青年文壇』などに投稿する。十九歳の時、両目を患い、約半年間失明に近い状態が続いた。治癒に三年を要し、上級学校進学への夢が絶たれてしまった。二十三歳の時家業を継ぐ。

本格的に歌の道を歩み始めたのは三十歳になってからだ。だが、この頃から急速に耳が聞こえにくくなっていった。

大正十一年(一九二二)七月、下関清末の毛利碧堂が主宰する『白梅詩社』に参加、県下で初めての歌誌『白梅』の編集・発行を担当し、歌作や評論に活躍した。

大正十三年(一九二四)、三十四歳の時、哀歌鳥は不治の難聴を悲観する余り、阿蘇の噴火口で自殺をはかろうとする。既に妻子があり、大正十一年(一九二二)には第一歌集『聾者の歌へる』を出版していたにもかかわらず、この時の哀歌鳥はすっかり死の誘惑に囚われてしまっていた。ところが警邏中の警察官に噴火口の前で見咎められて連れ戻され、自死を思い止まったのだという。当時の哀歌鳥は、哀切きわまりない情感の伝わってくる歌を、数多く詠んでいる。

『白梅』は県歌壇に多大の影響を残して大正十四年(一九二五)の末、第四卷第三号をもって終刊となった。哀歌鳥はその後、いくつもの短歌同人誌に関わりながら、独自の境地を開拓していった。

昭和二十五年(一九五〇)七月、歌誌『自画像』を主宰・創刊する。ところが、翌昭和二十六年(一九五一)一月五日長男一穂が死亡。このことで哀歌鳥は深く落胆し歌誌編集の意欲を喪失、『自画像』は二月に廃刊となった。

しかしその後立ち直り、岩松文彌主宰の歌誌『あらつち』に昭和二十八年(一九五三)より参加、中心的存在として活動する。昭和四十三年(一九六八)夏以降は編集を担当、四十八年(一九七三)九月から主宰となった。昭和四十五年(一九七〇)三月には、八十歳を記念して歌集『自画像』を出版。自己の境遇を叙情的に歌い上げた秀歌の数々が収められている。県歌壇の重鎮として多くの後進を育て、昭和五十二年(一九七七)四月二十四日永眠。享年八十七歳。

(文・森川信夫)



右の歌碑は、防府天満宮の西側、酒垂公園の入口近くにある。哀歌鳥存命中の昭和五十年十一月三日除幕式。作者自ら歌を選び、「あらつち歌会」の会員らによって建てられた。

あふぎ見れば そらの青さに うまれたる
天華とも見ゆ しろき木蓮

哀歌鳥

阿蘇(一)

警告に発見されて果さず

いまははやのがるすべなししかすがに
いきむおもひのわれにわきこず
なにかもいきのいのちをながらへて
これのつらさにたへらるべしや
まけながきこのゆくさをたれとともに
なみだをわけむさびしきいのち
いくるべきおもひをもたずいきつづく
さびしさはつひにすくはれざらむ

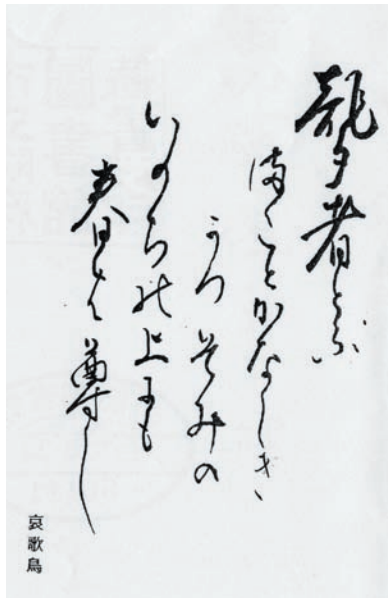
折々の歌

真実にま向ふ事のさびしさよ
常に仮面をかぶるわたくし
つま立ちて生くるかなしき崩れゆく
浪の過程に似たるわが生
春泥の語感はよろし春の夜の
灯かげゆらめくぬかるみの道
あらそひとならむ言葉をおさへつつ
煙草の煙にがく飲み込む

(歌集『自画像』(昭和45年・自画像刊行会刊)より抜粋)

大田哀歌鳥 年譜

明治23(一八九〇)年	一五歳
明治38(一九〇五)年	一九歳
明治42(一九〇九)年	二三歳
大正2(一九一三)年	三〇歳
大正9(一九二〇)年	三二歳
大正11(一九二二)年	三五歳
大正14(一九二五)年	六〇歳
昭和25(一九五〇)年	六一歳
昭和26(一九五二)年	六三歳
昭和28(一九五三)年	六四歳
昭和29(一九五四年)	七二歳
昭和36(一九六二)年	七二歳
昭和37(一九六二年)	七五歳
昭和40(一九六五年)	七五歳
昭和43(一九六八)年	七八歳
昭和45(一九七〇)年	八〇歳
昭和48(一九七三年)	八三歳
昭和50(一九七五年)	八五歳
昭和52(一九七七年)	八七歳



筆 跡
(歌集『自画像』より)



歌誌『あらつち』

(提供・森川信夫)